



カトリック召命チームのサイトはこちら [▶](#)

第一回「召命担当者の集い」のまとめ

2012年10月12日（金）～13日（土）

四ッ谷 麴町教会

ヨゼフホール、

テレジアホール

マリア聖堂

カトリック召命チーム

テーマ：召命の促進を目指して ー直面する問題とその解決案ー

I. 溝部脩司教の講演 ー召命についてー

- A. 個人が自分の召命を識別できる環境を作る
- B. 黙想方法を伝授
- C. 識別
- D. 捨てること
- E. 召命の識別と導入
- F. 司祭の召命

II. 溝部司教の講演を聞いての分かち合いから

- A. 「召命育成」広い視野で考える
- B. 「召命」を広い意味で考える
- C. 召命識別の環境を作る
- D. 青年たちの霊的成長力を引き出し、育てる
- E. 今の教会の状況に失望しない
- F. 召命識別の同伴者
- G. 教区・修道会のセールスポイントを明確にする
- H. 信徒の養成

III. 現在行われている種々の召命活動

IV. 召命活動をする上での留意点（キーワード）と諸問題、そして対応

- A. 教区や各修道会の枠を超えた協力体制可能性
- B. 自分の教区・修道会のセールスポイントを明確に
- C. 召命活動の協力体制
- D. 入会希望者と年齢の高齢化その問題
- E. 召命の動機
- F. 召命黙想会のやり方
- G. 外国人召命について
- H. 若者たちの自主的な集い
- I. 心の傷を負った人たちと召命
- J. 退会者・退学者・離婚者などのアフターケアが大切
- K. 召命のための祈り

V. カトリック召命チームへの希望と提案

VI. 神に向かう文化を創る

第一回「召命担当者の集い」のまとめ

日時：2012年10月12日（金）13:00～13日（土）12:30 まで

場所：麹町教会 ヨゼフホール、テレジアホール、マリア聖堂

参加者：司教2人、信徒4 神学生1 修道女50 修道士2 教区司祭5 修道会司祭13
召命チーム（14）：信徒7 修道女4 修道士1 司祭2 （総勢91名）

テーマ：召命の促進を目指して ー直面する問題とその解決案ー

I. 溝部脩司教の講演 ー召命についてー

*望洋庵・・・場を作る・・・時を共に過ごす・・・

- ・自分で自分の寝る場を作り、帰るときには掃除して帰る・・・立つ鳥跡を濁さず。
- ・基本は大切・・・ミサ、祈り、黙想、み言葉の分かち合い・・・これは必ず出席
- ・他のことは、自分のペースで

*望洋庵で留意していることは以下のこと

A. 個人が自分の召命を識別できる環境を作る

- ・早い段階から、司祭・修道者の召命プログラムを実施する（組み入れる）のではなく、
- ・青年たちの成長を見守りながら、共に歩むこと。
- ・青年たちが自分の将来を決め、自分なりの召命（医者、議員、科学者、技術者、福祉、司祭・・・）を、少しずつ煮詰めていけるようにする。
 - ・本物に出合わせることが大切・・・本物に出合う材料を提供する
 - ・自由な判断、選択・・・自分に取って一番良いものを選択出来るように、支える。
 - ・禅問答の利用・・・問題を与え答えを考えて貰う・・・こちらが解答を与えない・・・

B. 黙想方法を伝授

- ・五感を大切にする・・・イメージーションを使う・・・書き留める
- ・座禅の呼吸による導入
 - ・「何も考えるな、感じるな」の無の境地だけでは、短期養成においては先に進めない。
- ・知性を使った黙想・・・知性を十分に働かせる・・・
 - ・適当な手引き書なども使う・・・
 - ・黙想をノートに書き留めさせる（初心者）
 - ・その日、その月の目標を定めさせる・・・

*内省的祈りは召命識別の不可欠の行い

- ・キリストは、しばしば砂漠で祈る
- ・パウロは、光で打たれたのち、アラビアの砂漠に籠もった・・・親類や長老には相談せず、

C. 識別・・・自分の心が今、何処におり、何に向かっているかを識別する・・・識別基準と方法

*キリストの教えに徹するために・・・

- ・ロヨラのイグナチオの霊操方法を利用
 - 第一段階・・・自分の罪深さを知る
 - 第二段階・・・キリストの生涯を黙想
 - 第三段階・・・キリストの受難を黙想
 - 第四段階・・・キリストの復活を黙想

*識別に使われるテキスト

- ・種まきのたとえ・・・神に聴くということに力点を置く黙想を行うことで
 - ・私の欲と神の恵みの関係を見つめさせる

- ・金持ちの青年・神に任せ得ない
- ・善いサマリア人・隣人になれる人
- ・パウロの回心・罪深さの自覚から回心が始まる
- ・ペトロの話し・イエスを自分の考えにあわせさせる・

D. 捨てること・捨てることが識別のためには不可欠

- *イエスに従うもの・イエスの受難と死・「自分の十字架を取って私に従え」
- *マリアの黙想・イエスに近づく・

告知・カナ・家の外に立つ・遠くから十字架を・十字架の下に・復活の証人・聖霊降臨

*捨てるとは

- ・ 規律ある生活・
- ・ 物を大事にする・清潔さ・エコの生活・
- ・ 慎み、喜んで交わる・
- ・ 同伴者に忠実
- ・ 単純質素・などなど

E. 召命の識別と導入

- ・ 自分の召命を考える
 - ・ 種々の召命・教育、福祉、政治、医療、法律、社会活動、教会活動・
- ・ 教会への召命の場合
 - ・ 教区か修道会か・
 - ・ 司祭とは、修道会とはなどの情報が十分に提供される・
- ・ 修道会の場合・そのセールスポイントを的確に掴むことを助ける・
 - ・ 修道会はセールスポイントを明確に打ち出し、示し、感じとらせることが大切・
 - ・ 打ち出されたセールスポイントが魅力あるものとなるために工夫をするべき。

F. 司祭の召命

- ・ カトリック教会はミサと告白が命である・司祭は不可欠である
 - ・ キリストを現存させる秘跡・ミサ・
 - ・ キリストと繋がる道を清める・告白・
 - ・ カテケージスが必要
- ・ 召命活動のためには、青少年司牧が不可欠・信徒の養成・家庭の聖性が重要
- ・ 修道司祭も司教と結ばれている

II. 溝部司教の講演を聞いての分かち合いから・

A. 「召命育成」広い視野で考える・青年の成長に合わせて召命を育てる

- ・ 広い視野での養成を考える・召命を広く捉え、青年の成長に同伴しながら、召命の識別を助ける。
- ・ いきなり「司祭・修道者」召命を打ち出しては、青年が萎縮する
- ・ 青年司牧から召命司牧へのプロセスを大切にする。

B. 「召命」を広い意味で考える・超教区、超教会

- ・ 自分の修道会に限らず、教区、修道会、宣教会、在俗会、兄弟会などが一つになって協力し合う
- ・ 単発的に自分の修道会だけで召命活動をしていても効果は薄い・
- ・ 召命活動は自分の修道会ためだけではよくない。

C. 召命識別の環境を作る

- ・ 召命を識別出来る環境（時と場）を作る。
- ・ 今までのような召命活動、養成方法に固執しない。
- ・ 識別時期は多様にあるが24歳ぐらいから可能・24歳までは色々人生体験を持つ。
- ・ 青年たちが自由な選び、識別、判断、決断ができる環境を作る
- ・ 青年たちの中には「自分で決められない人」が多くなっている。場と同伴が必要。

D. 青年たちの霊的成長力を引き出し、育てる

- ・祈りに導き、「聴く」ことを大切にし、み言葉を観じ、生きる力を引き出す。
- ・「神との出会い」に導くみ言葉を使った識別を実践させる。
- ・召命を考える人たちのために祈ることも重要
- ・「召命」に応えるためには、どこかで「捨てる」ことが重要である。

E. 今の教会の状況に失望しない

- ・教会の力に信頼する・教会の頭はキリスト・身体は教会メンバ・魂は聖霊・
 - ・教会の力・癒し、和解、赦し、愛の実践、バランス、
- ・青少年は神に向かう力を持っている
- ・今の時代は本物を待っている・見極める時代・親、司祭、修道者の本当の信仰が見られている。
- ・青年たちのネットワークでのつながりはダイナミックであり、若者は物事を真剣に考えている。
 - ・色々な人々と繋がっていくことが大切
- ・青年たちの持つ力を信じるのが大切・
 - ・信じる力、関わり力、受け入れる力、奉仕する力、愛する力・などなど
- ・青年たちのニーズに教会が修道会が応えることが必要
 - ・集まりの場と機会を作る
 - ・祈りの場と機会を作る
 - ・学びの場と機会を作る
 - ・共に遊ぶ場と機会を作る
- ・自分たちのできることに、青年を合わせるのではなく、青年たちのニーズに合わせる努力

F. 召命識別の同伴者

- ・一人一人に最後まで丁寧の同伴できる力量が不可欠・このような人材が不足している
- ・召命同伴、識別の重要性と修道会がおかれている緊急的窮状（高齢化と人材不足）の間にギャップがあり、ジレンマを感じる。つまり・
 - ・ゆっくり時間をかけて同伴することが難しい、
 - ・他の修道会を含めた識別には心理的な束縛ははたらく・自分の修道会を優先する・

G. 教区・修道会のセールスポイントを明確にする

- ・司祭、修道者は自分たちのあり方に自信がない・魅力はない・セールスポイント強め、売り出すことが不可欠
- ・修道者のアイデンティティを明確にする・自己養成に力を入れる
- ・司祭に魅力を感じない・司祭たちは若者へアプローチをしない・

H. 信徒の養成

- ・召命の母胎となる信徒の信仰を育てる。
- ・信徒へのカテキズムを通して、自分たちのあり方を深めさせる

III. 現在行われている種々の召命活動

- * 「出会いの場」（祈りと分かち合い）を週に一度、行っている。
- * 「召命の集い」
 - ・月に一度・召命を考えている人が集い、分かち合う。
 - ・年に3度・しかし反応はない・継続が力
- * 「夏の集い」・・・外国人が参加・カテキズムの足りなさに気づいた・スタッフが不足
- * 「サマープログラム」年に一度・司祭候補者、修道志願者の召命の確認のため。
- * 「レクチオ・ディヴィナ」・・・40歳ぐらいまで、定期的に行っている。

- * 「み言葉にふれる」・・・小教区全体での取り組みが望ましい。
- * 「ファミリー合同の集い」・・・教会学校の要請で・・・家族の人たちが集うよい集まりとなっている。
- * 「祈りの集い」・・・シンボルとなるものを準備・・・歌、光、沈黙、静寂、イメージーション・・・集まっている人の心をつなげる。
- * 教区行事、召命の集いなどへの協力
 - ・ 志願者を「教区行事や召命の集い」に参加させ、協力させることで、召命を考えさせ、他の人の召命のために祈らせる。
 - ・ 養成担当者もこれらの行事などで、召命の種を蒔き、その芽を探している。
- * クリスマス会などに青年たちを招く
- * WYDや青年の集い・・・そこで出会う人々への呼びかけをおこなう。
 - ・ WYDや青年の集いにシスターの参加が少ないことに疑問を持つ若者もいる

IV. 召命活動をする上での留意点(キーワード)と諸問題、そして対応

A. 教区や各修道会の枠を超えた協力体制可能性

- * 合同の召命黙想会、召命イベントの開催
 - ・ 修道会、教区にこだわらずに合同で企画できたらよい。
 - ・ 召命促進のために協働することが必要
 - ・ 参加人数を気にすることなく、定期的に行い続けることが大切
- * 「召命識別の場」を日本教会として作ることは可能か
 - ・ 超教区、超修道会で召命育成の場を作れないか・・・望洋庵の如き家
 - ・ 養成の人材を育成することが大切
- * 開いた「召命の集い」
 - ・ 選びの自由・・・どの修道会というより、どこにでもという開いた形での集いが大切
 - ・ 会員を増やすための集いではなく、「その黙想者がキリストに真に出会い、自分を何らかの召命に向けて奉獻する心を支えるお手伝い」という意識が大切。
- * キリスト教の信仰教育
 - ・ カトリック要理を知らない人たちが多く・・・召命は育たない・・・親の信仰教育の重要性
 - ・ 特にW言語の子供の場合は、要理ができていない。
 - ・ 洗礼の大切さ

B. 自分の教区・修道会のセールスポイントを明確に

- ・ 会のカリスマに従って生きる、現す、伝える。
- ・ そのカリスマにいつも喜んで生きる、生き活きと生きることが大切である。
- ・ 修道者のアイデンティティの再確認が必要
- ・ 修道者の生活そのものが「希望のしるし」となる
 - ・ 自分たちの修道生活を徹底的に話し合う場と機会が必要・・・事業と修道会の問題など

C. 召命活動の協力体制

- * 召命活動をチームで行う。共同体や他の会員の協力が必要・・・一人では荷が重すぎる
 - ・ 召命担当者だけに荷を負わせないこと・・・みんなで行う
 - ・ みんなで祈っていくことが重要
- * 入会希望者が何処で共同生活の実習をするのか・・・共同生活をする場がない。

- ・入会希望者自身、共同生活に難しい。

*入会希望者を受け入れる「共同体づくり」は重要である。

- ・会員が高齢となり、自分のやり方から抜けられず、共同体がギクシャクしている。

D. 入会希望者と年齢の高齢化その問題

*40歳までという限定があっても、50-60歳の人も来るし、精神的に病んでいる人も来る。

*30-40代の人たちの中に「祈りたい人」「修道会への入会」を希望する人が増えている。

- ・人間的にも、信仰の面でも成熟に問題がある場合が多い。
- ・年齢が近いのでコミュニケーションは取りやすい。

*会員と入会者の年齢差が大きいため、橋渡しをする人がいない。

*世代間のギャップがあるので話し合い、理解し受け入れ合う力量が必要となる。

- ・折り合う大切さ

*「祈り」「謙遜」「やる気」・・・この三つが揃えば、必ず召命は開花する。

- ・年齢が何歳であっても、この三つがあるならば司祭、修道者となれる。

E. 召命の動機

*「イエスに従う」というより、「～ができるから、いれてください」という人がいる。

*修道会への入会が「将来の健康や老後を考えて」「今の職場への嫌悪」「この世間の傷つけ合う関係に疲れて」などがある。

*動機を明確に育てていくことが必要である・・・キリストの従い、人のために生きることへ

*受け入れ側も、志願者を使徒職の補充員としてとらえ関わる場合がある・・・召命が失われる。

F. 召命黙想会のやり方

*「召命黙想会」・・・ギクシャクしておりうまくいっていない。

- ・指導（同伴）する司祭・シスターがいない。
- ・集まる若者に種々の相違がある・・・
 - ・キリスト教理解、聖書理解の度合いの違い
 - ・病んでいる人もくる
 - ・どのように集まりを有意義にできるか分からない。
- ・召命黙想会のあり方、青年へのアプローチの仕方などを学びたい

G. 外国人召命について

*外国人志願者、神学生の受け入れと養成

- ・会の召命の不足を外国人によって補うのは間違い。宣教者の自給自足が福音宣教の原則
- ・養成の初期段階は自国で行い、その上で日本に送るようすべき。
- ・戦前、戦後多くの宣教者が日本で宣教してきた・・・言葉ができなくても生き方で宣教できるはず。
- ・日本の人を「キリストの言葉に生かす」という宣教の覚悟を育てるべき。

*使徒職の現場に出たからが大変・・・言葉の問題や社会の偏見などに苦しむ場合が多い

H. 若者たちの自主的な集い

*若者は「神との出会い」のための感性が豊かである。

- ・若者たちも神に向かう霊的力を持っているので信頼する

*若者たちが「自分たちだけの会合」を持ちたいと考える。

- ・見守ることが大切
- ・彼らの中に自然に入り込み、自然に祈りに導く、恵みに気づかせることが大切
- ・若者たちに聴く・ニーズを知る必要がある
 - ・何でも若者に合わせるということではない。
 - ・教会の教えはきちんと伝える

*若者と共に動く

- ・かれらに企画させ、実行させる・同伴し、時間や規則のけじめはつけさせる。
- ・分かち合いを行う場合、
 - ・イエスのシンボルを中心に置く・目に見えるものが必要
 - ・同伴者は一言だけ・あとは若者に多くを語らせる
 - ・聴くことを大切にする
- ・長いつきあいと忍耐
- ・若者の側に留まるシスターの存在は重要
- ・信念をもって導く

*1対1の関わりが大切

- ・心に傷を持つ人が多い・関わり方が重要
- ・深い、聴き合う出会いが必要

*若者たちは本物を求めている

- ・司祭も修道者も自分の召命を精一杯生きるべき
- ・司祭・修道者の「霊的香り」「後ろ姿」が若者たちを引きつける

*青年たちの現状

- ・精神的病を負った人が多い・家庭、学校教育、社会の競争などのために
- ・精神的に病んだ人に対応する人が少ない
- ・被災地ボランティアに出かける若者たちは元気である。
 - ・被災者から多くを学び取っている現実がある。
 - ・自分たちが生かされている感触をうけている。人のために奉仕の精神に触れている。
- ・何故、教会に来なくなったのか・魅力を感じていないのか？
 - ・サイバーミッション・情報の世界では青年は生き生きしている
 - ・癒し・癒しに答え得る教会なら来られるのではないか

*社会を知る

- ・青年たちが置かれている社会とその動きを知ることも重要

1. 心の傷を負った人たちと召命

*心の傷を負った人との関わり・召命の以前の問題

- ・現代の若者は心に傷を負っていたり、傷つきやすい。
- ・自己肯定感、自己評価が低い

*心の傷を負った人への対応

- ・養成担当者が十分に用意されていることが大切
- ・PRHなどを通して自分と向き合う養成をすることも望ましい。
- ・精神障害者が入会を希望し、多くの修道会を回っている場合があるので、超修道会的ネットワークで情報を交換することも重要ではないか。情報交換、共有と個人情報の守秘を大切にしながら。

*団塊の人材の協力が得られないか

・多くの能力・技術（カウンセラーなど）をもった団塊の人たちが定年になっている。

J. 退会者・退学者・離婚者などのアフターケアが大切

*これらの人は教会に来なくなる・雰囲気は彼らをゆるさない

*教会が行うべきアフターケアの悪さが、他の信者に悪いイメージを与えている……

K. 召命のための祈り

*祈りによる支援

- ・自分の召命のために祈りは重要
- ・人の召命のために祈りは不可欠
- ・信徒の人たちが、召命のため、修道者のために祈ることが必要・司祭のためだけでなく

*一般的祈りでなく、具体的、個別的祈りが有効である・「○○さんのために……」

*召命の結実のためには、「祈りと活動」の調和が不可欠

V. カトリック召命チームへの希望と提案

○「召命担当者の集い」の開催と内容

*召命担当者の集いを続けて欲しい・16教区全部（それぞれの教区で）行うとよい

*召命担当者や養成担当者の合同会議・シンポジウムを考えて欲しい

*養成に関わる人たちの養成に関する研修などを開いて欲しい

*信徒の召命に関する集いも考えて欲しい・信徒が活気づくと召命は活気づくはず

*宿泊を含め、横のつながりを深め得る集いを考えて欲しい

*司教様方や司祭たちが、もっと多く参加するなら日本全国で盛り上がるはず。

*司祭が参加出来る日程を考えて欲しい

○青年たちの参加

*このような集いの中で、若者たちにも発言（発表）の場があるとよい。

○チームへの直接的要望

*召命担当者間で情報交換できる場、ネットワークができるとよい・召命チームで実施中

*HPに召命担当者からの質問コーナーや希望を述べる場を作って欲しい

*日本教会全体が召命問題に取りくむために、問いかけ、具体的な提案を考えてほしい。

○今回話された内容、課題を具体化して欲しい

*青年たちとの関わり方・アプローチ（呼びかけ）の仕方・識別の仕方

*各教区、各修道会のセールスポイント（魅力）の明確化

*召命黙想会に参加する精神障害者などへの対応と癒し

VI. 神に向かう文化を創る

*人々の神離れ、教会離れの現実・召命を衰退させている

*神離れの原因

①意識が外に向かう・情報社会、ものの豊かさ、競争主義・

心が外のものに捉えられている・

②自分の力への過信・競争主義、自由・主体教育のアンバランスから

③教会内の問題・教会内分裂・競争・比較・差別

教会メンバーが与えるつまづき

* 神に向かうため

- ①内省的祈りの奨励・み言葉の黙想・観想・
- ②生かされて生きる・命は頂きもの・の感覚を奨励・感謝の文化を再構築
- ③教会の再生
 - ④み言葉と聖体に生かされ、癒され、力をうけ、喜び分かち合う教会
 - ⑤司祭、修道者の模範・喜びと感謝に生きる・本物に生きる
 - ⑥修道会のセールスポイント・本物に生きる
 - ⑦信仰教育・カテキズム、家庭での信仰
 - ⑧信者の喜びと一致・愛の実践

* 今の教会の状況に失望しない

- ・ 教会が持つ力を信頼する・
 - ・ 本物に生きる力・癒す力、回復の力、調和の力、ダイナミックな愛の力など
 - ・ 奉仕、助け合い、展望の力、導く力など
- ・ 青年たちが持つ力を信頼する
 - ・ 信じる力、関わり力、受け入れる力、奉仕する力、愛する力・などなど
 - ・ 青少年は神に向かう力を持っている
 - ・ 本物を見極めるちから
 - ・ 青年たちのネットワークはダイナミックであり、若者は物事を真剣に考えている。
 - ・ 色々な人々と繋がっていくことが大切

結び

- ・ 「第一回召命担当者の集い」は実り豊かな集いとなった。
 - ・ 溝部司教が行っている「望洋庵」の存在は、日本における召命に希望を与えている。
 - ・ 召命を広く捉えること、召命のために超教区、超修道会の働きが重要。
 - ・ 識別は重要である・青年たちには神の呼びかけにこたえられる力があるから信頼すべき。
- ・ 他の修道会、教区における召命活動の苦勞を知り合えた
 - ・ いろいろ試みても収穫は望ましくない。
 - ・ 精神的に病んだ人たちが多く集まる・
 - ・ 外国からの志願者の養成の問題
 - ・ 志願者の年齢が上がってきている
 - ・ 養成者がもって養成されるべき
- ・ 反省点
 - ・ 期間が短かったので相互の交わりが十分にできなかった。
 - ・ 教区の召命担当者司祭の参加が少なかったのは残念・日程、曜日の問題がある
- ・ 今後の課題
 - ・ 召命の活性化のために
 - ・ 召命の土壌をどのように作るか・種を蒔くか
 - ・ 召命の芽を教会共同体でどのように育むか
 - ・ 召命の識別をどのように行うか
 - ・ 教区、修道会の全体的協力体制をどのように作るか